




論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	和田 陽介
論文担当者	主 査 島 正 之 
	副 査 小山 英則 
	副 査 藤岡 宏幸 
学位論文名	Association between timed up-and-go test and future changes in the frailty status in a longitudinal study of Japanese community-dwelling older adults (日本の地域在住高齢者における timed up-and-go test と将来の フレイルの変化に関する縦断研究)
<p style="text-align: center;">論文審査の結果の要旨</p> <p>日本の地域在住高齢者において、Timed up-and-go (TUG) test と将来のフレイルの変化との関連を縦断研究により明らかにすることを目的とした。地域在住の 65 歳以上の者を対象に、初回および 2 年後に 2 回の調査を行い、Cardiovascular Health Study 日本語版 (J-CHS) を用いてフレイルの評価を行った。2 回の調査における J-CHS 下位項目の該当項目数が初回より減少したものを Favorable change group (FCG), 増加したものを Unfavorable change group (UCG) とした。該当項目数が不変であった者は、2 回とも該当項目のなかった者は FCG、2 回とも 3 項目該当した者は UCG、2 回とも 1 項目もしくは 2 項目の者は Unchanged as prefrail group (UPG) とした。この 3 群について、初回調査時の TUG との関連をロジスティック回帰分析により解析し、さらに TUG のフレイルの変化に関する予測能を Receiver operating characteristic (ROC) 曲線を用いて解析した。</p> <p>2 回の調査に参加した 545 名の平均年齢は 72 歳、357 名 (65.5%) が女性であった。FCG は 315 名、UPG は 105 名、UCG は 125 名であった。TUG は共変量の調整後も FCG (OR 0.79, 95%CI 0.68-0.92)、UCG (OR 1.27, 95% CI 1.09-1.49) と有意な関連を認めた。TUG の UCG に対する予測能は、曲線下面積が 0.59 であった。TUG のカットオフは 6.3 秒、感度 49.6%、特異度 66.0% であった。</p> <p>フレイルの変化を予測することはハイリスク群を同定し早期介入ができる点で重要である。本研究で TUG の UCG に対する予測能は低かったが、UCG では身体機能以外の項目が悪化した例が多く、TUG 単独では予測能が低かったと思われた。</p> <p>以上より本研究は、初回調査時の TUG は 2 年後のフレイルの変化と有意に関連することを明らかにし、その予測能を高めるためには他の評価方法と組み合わせて行うべきであることを示唆しており、学位授与に値すると判断した。</p>	